



Title	ニヴフ語東サハリン方言における指示語の非現場指示の用法について
Author(s)	蔡, 熙鏡; Che, Hee-kyung
Citation	北方言語研究, 8, 115-125
Issue Date	2018-03-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/68733
Type	departmental bulletin paper
File Information	07chae.pdf



ニヴフ語東サハリン方言における指示語の非現場指示の用法について*

蔡 熙 鏡

(東京外国語大学特別研究員)

1. 導入

指示語のタイプは、形態統語的な観点から名詞類指示語 (Nominal demonstratives)、場所副詞類指示語 (Local adverbial demonstratives)、動詞類指示語 (Verbal demonstratives) に分けられることがあり、中でも動詞類指示語を持つ言語は類型論の観点から見て、比較的稀であるとされている (Dixon 2010: 224)。

ニヴフ語¹東サハリン方言の場合は、動詞類指示語を含めて、以下に示すようなタイプの指示語を持っている。

(1) ニヴフ語東サハリン方言における指示語のタイプ

名詞類指示語		副詞類指示語	動詞類指示語
代名詞	連体修飾語		
<i>tud / hud</i> etc. 「これ・こいつ／それ・そいつ」 <i>tus / hus</i> etc. 「ここ／そこ」	<i>tuj / huɟ</i> etc. 「この／その」	<i>təmdʲigur / həmdʲigur</i> 「このように／そのように」	<i>təmdʲid / həmdʲid</i> 「このようである／そのようである」

人や物を指すことのできる代名詞の *tud / hud* と場所を表す代名詞 *tus / hus* は、それぞれ指示語根 *tu-* / *hu-* に名詞化接尾辞 *-dʲ* と *-s* が付加された形式であり、連体修飾語の *tuj / huɟ* は同じ指示語根に形動詞接尾辞 *-ɟʲ*³ が付加された形式である。一方、副詞類指示語は動詞類指示語の語幹に *-gu-r* [-CAUS-CVB.3SG] の接尾辞が付加されて形成される。

ニヴフ語の指示語を扱っている研究としては、Panfilov (1962)、Krejnovič (1979)、Gruzdeva (2006) などがあり、特に Gruzdeva (2006) はニヴフ語の指示語が持つ非現場指示の用法を扱っているという点で重要な研究であると言える。

本稿では、東サハリン方言の名詞類指示語（場所指示代名詞は除く）が持つ非現場指示の用法を記述することを目的とする。本稿の構成は次の通りである。2節では、先行研究と

* 本稿の執筆にあたり、お二人の査読者の方から貴重なコメントをいただきました。心よりお礼申し上げます。

¹ ニヴフ語の系統関係は不明。主要部標示型の主に接尾辞を用いる膠着型の言語であり、SOVの基本語順を持つ。方言はアムール川下流域とサハリン島北西海岸の「アムール方言」、サハリン島北東海岸を中心とする「東サハリン方言」、北のシュミット半島の「北サハリン方言」、ポロナイスク地方の「南サハリン方言」に分けられるのが一般的である。

² 直説法の屈折接尾辞の *-d* ~ *-nd* と同形であることに注意。Mattissen (2003: 21) は、この直説法の接尾辞について、元々は名詞化の機能を担っていたと述べている。

³ アムール方言の場合は、語末の鼻音が落ちるという音変化が起こり、形動詞接尾辞は *-Ø* で標示される。一方、東サハリン方言の場合は *-ɟ* ~ *-Ø* の異形態を持つ。

してニヴフ語の指示語が持つ文脈指示機能に関して述べている Gruzdeva (2006) をまとめる。3 節では、ニヴフ語東サハリン方言の指示語が持つ非現場指示の用法について検討し、4 節では、指示語の使い分けについて考察する。

2. 先行研究

Gruzdeva (2006) は、ニヴフ語東サハリン方言とアムール方言における「対象指示代名詞 (object demonstrative pronouns)」の意味・語用論的な特徴について述べている研究である⁴。ここでは、Gruzdeva (2006) をやや詳しく見ていくことにする。

まず、東サハリン方言の指示代名詞に関しては、以下に示す 6 つからなる体系として捉えている。

(2) 東サハリン方言の指示代名詞 (Gruzdeva 2006: 193)

proximal	close	medial	remote	distal
<i>tud</i>	<i>hud</i>	<i>eyd</i>	<i>ayd</i>	<i>aiyd</i>
<i>tunt</i>	<i>hunt</i>	<i>ehəd</i>	<i>ahud</i>	<i>aixnt</i>
<i>tənt</i>	<i>hənt</i>	<i>ehənt</i>	<i>aud</i>	—

invisible

kud / kunt

Gruzdeva (2006) は、指示語について類型論の観点から述べている Himmelmann (1996) が提示している指示語が持つ主な 4 つの用法からニヴフ語の指示語を検討し、ニヴフ語の指示語は「現場指示の用法」と「前方照応の用法」のみを持つとし、それぞれの用法について述べている。

なお、Himmelmann (1996) が提示している指示語が持つ主な 4 つの用法は、次の通りである。

(3) 指示語が持つ 4 つの用法 (Himmelmann 1996: 218–243)

- situational (exophoric) 「現場指示的」
- discourse deictic 「談話指示的」
- tracking (anaphoric) 「前方照応的」
- recognitional 「認識的」

現場指示の用法 (exophoric use) については、(2) の上段で示した 5 つの形式は目に見える指示対象を、下段の *kud / kunt* は目に見えない存在を指し示すときに用いられる「不可視代

⁴ Gruzdeva (2006) の「東サハリン方言」に関する記述は、主としてトゥミ川河口地域（ノグリキ周辺）の話者のデータに基づいており、本稿で用いている丹菊・バクリナによる資料はトゥミ川上流域の話者のデータである。両者はどちらも「東サハリン方言」ではあるものの、音声・語彙の面で若干の差が見られるようである (丹菊 2008: 1-2)。

名詞 (invisible pronoun)』であると述べている。

さらに、不可視代名詞は話者との距離に関係なく、すべての場合に用いることができるという (Gruzdeva 2006: 193)。それぞれの形式が表す意味は次の通りである⁵。

(4) Gruzdeva (2006: 193-4; 東サハリン方言)

a. <u>tud</u> =ux	mu	iv-d	b. <u>hud</u> =yun=doχ	c ^h o	roz-d
this=LOC	boat	be-IND	that=PL=DAT	fish	give.out-IND
「 <u>この人</u> は船を持っている。」			「 <u>その人たち</u> に魚を配った。」		

‘proximal’ 代名詞 *tud* は、話者の手が届くほど近い、目に見える、通常は話者が知っている指示対象を表す一方で、‘close’ 代名詞 *hud* は話者から少し離れた、目に見える、しばしば話者の知らない指示対象を表すという (ibid.: 193)。

さらに、次の例のように、‘proximal’ と ‘close’ 代名詞が対比の機能を持って使われる場合は、‘proximal’ 代名詞は ‘close’ 代名詞に取って代わる (ibid.: 194)。

(5) Gruzdeva (2006: 194; 東サハリン方言)

<u>hud</u> =yun	ajm-d	<u>hud</u> =yun	ayzu-d
that=PL	know-IND	that=PL	do.not.know-IND
「 <u>この人たちは</u> 知っている。 <u>その人たちは</u> 知らない。」			

‘medial’ と ‘remote’、‘distal’ 代名詞の違いは、純粹に空間的な差であり、すべての用例で目に見える指示対象を指していると述べている (ibid.: 194-5)。

不可視代名詞については、指示対象が遠くて見えない場合と、話者の近くにあるが、何かに隠れていて見えない場合があり得るとしている。

(6) Gruzdeva (2006: 195; 東サハリン方言)

<u>kud</u>	jaŋko?
that	where
「 <u>あれ</u> はどこ？」	

次に前方照応の用法 (anaphoric use) については、6 つの指示代名詞のうち、‘close’ 代名詞の *hud* と不可視代名詞の *kud* のみが前方照応に用いられ、どちらを使うかは談話における先行詞との距離によるとしている (ibid.: 195)。

まず、‘close’ 代名詞の *hud* は、典型的には先行する節、または句に位置する非主題の先行詞⁶を参照するという。このことから Gruzdeva (2006) は、‘close’ 代名詞の *hud* を「即時

⁵ 本稿で用いる先行研究からの例文の形態素分析・グロス是一部変更した箇所があるが、日本語訳は筆者によるものである。東サハリン方言のテキスト集からの例文の形態素分析・グロスは筆者によるものであるが、日本語訳に関しては元の訳で示した。

⁶ 主題である場合は、再帰代名詞で表される (Gruzdeva 2006: 195; footnote 4)。

／短距離照応代名詞 (immediate / short-distance anaphoric pronoun)」と呼んでいる。

- (7) Gruzdeva (2006: 196; from Nedjalkov & Otaina 1981: 192; アムール方言)

amək p^h=ōla dəu-jnə-ra həd' p^h=rəu-jger-ra
mother REFL=child teach-INT-CVB.3SG that REFL-teach-do.not.want-CVB.3SG
「母は自分の子どもを教えようとしたが、それ(子ども)は勉強しようとしなかった。」

次に、不可視代名詞の *kud* については、「遅延／長距離照応代名詞 (delayed / long-distance anaphoric pronoun)」と呼んで、‘close’ 代名詞の *hud* と不可視代名詞の *kud* の用法の違いが表れているものとして以下の例を挙げている。

- (8) Gruzdeva (2006: 196-197; from Panfilov 1965: 223-4; アムール方言)

...pal erq tulks=uin umgu_i jaqr^h hum-d' ... [66 phrases]
forest side dais⁷=LOC woman one be-IND
vi-r umgu_j ηəηk vo-r irlə-r
go-CVB.3SG woman hair take-CVB.3SG pull-CVB.3SG
t^həqadox volu-ror joc-c c^hi
backwards throw.down-CVB.3SG ask-IND you
p^h=ətək vijn-lo hokojan hə_i umgu it-c ... [3 phrases]
REFL=father feel.sorry-INTER then that woman say-IND
p^hu-ηan ku_i umgu ajma-ηan...
go.out-CVB that woman see-CVB

「森の方の住居跡の穴に一人の女性 *i* が住んでいた。[...66 句] 行って、女性 *j* の髪をつかんで、後ろに倒してから (彼は) 訊いた。あなたは自分の父親が可哀そうじゃないのか? そしたら その *j* 女性は言った。[...3 句] 外に出て (彼が) その *i* 女性を見たとき…」

Gruzdeva (2006: 196) は、この例について次のように説明している。この物語には2人の女性が登場するが、最初の女性 *i* は物語の初めのところで1回言及される。そのあと、2人目の女性 *j* が登場するまで、最初の女性 *i* は一度も出てこない。2人目の女性 *j* に対しては、登場してすぐ即時照応の *hə* が用いられている。物語の最初に出てきた女性 *i* は、後でまた登場するが、かなり前で言及されているので、話し手は遅延照応の *ku* を用いている。

要するに、先行詞との距離はかなり離れている場合、前の談話に出てきた指示対象を「再活性化」し、注意の焦点に戻す機能を果たすと分析している (Gruzdeva 2006: 196)。

最後に現場指示と前方照応の機能が ‘proximal’ 代名詞 *tud* と ‘close’ 代名詞 *hud* の選択に関わる例として、次の2つの例文を挙げている。

⁷ ニヴフ語アムール方言の辞書である Savel'eva & Taksami (1970: 364) では、「サハリンの旧居住地に残された穴」とあるが、ここでは先行研究での英訳をそのまま示した。

- (9) Gruzdeva (2006: 197; from Panfilov 1965: 224; アムール方言)

hokor^h mer ηafq ul mi=x
 then we.INCL friend bosom in=ABL
i=ηojaq yuz-r it-c atak=a
 3SG=egg take.out-CVB.3SG say-IND grandfather=VOC
tədi ajma-ja tədi sidⁱ=ηa?
 this look-IMP.2SG this what=Q

「それから私たちの友達はポケットの中から卵を取り出して言った。おじいさん！
これ見て！これ何？」

- (10) Gruzdeva (2006: 197; from Panfilov 1965: 229; アムール方言)

əcik η=imə-dⁱ oxt ul mi=in hum-dⁱ
 old.woman 1SG=give-NMLZ drug bosom in=LOC be-IND
hədi yuz-t ij-nəktə
 that take.out-CVB.1SG eat-IMP.1SG

「おばあさんが私にくれた薬がポケットの中にある。それを（私に）食べさせて。」

例 (9) では ‘proximal’ 代名詞 *tud* が現場指示の用法で用いられており、例 (10) では ‘close’ 代名詞 *hud* が前方照応の機能を果たしている。Gruzdeva (2006: 197-8) によれば、両方とも話者の懐の中にある物を指示しているにも関わらず、例 (10) で前方照応の ‘close’ 代名詞 *hud* が選択されるのは、話者が聞き手の注意を指示対象である「薬」に引き寄せているわけではなく、さらに先行詞との距離が近いからであると述べている。

Gruzdeva (2006) は以上の分析から、ニヴフ語の対象指示代名詞の選択には、現場指示の機能では直示の中心との距離が関わっており、前方照応の機能においては先行詞との距離が関わっていると結論付けている。

しかしながら、前方照応の例の中には Gruzdeva (2006) の言う「先行詞との距離」というパラメータだけでは説明が難しいものが見受けられ、指示語が持つ用法に関して再検討する余地があると思われる。次節では、まずニヴフ語東サハリン方言の指示語が持つ用法について検討する。なお、分析の際には、東サハリン方言のテキスト集である丹菊・パクリナ (2008, 2014) を用いる。

3. 東サハリン方言の非現場指示用法

本節では Himmelmann (1996: 218–243) の指示語が持つ前方照応の用法と談話指示の用法に焦点を当てて、東サハリン方言の指示語を検討していく。但し、‘medial’ ‘remote’ ‘distal’ の指示語に関しては十分な用例数を得ることができなかったため、調査対象には入れていない。本稿では比較的によく用いられた ‘proximal’ ‘close’ ‘invisible’ 指示語の *tud* / *hud* / *kud* とそれぞれの連体修飾形のみを対象としている。

3.1. 前方照応

まず、Gruzdeva (2006) は、東サハリン方言の前方照応の用法を持つのは、‘close’ の *hud* と不可視代名詞の *kud* のみであると述べているが、‘proximal’ 指示語も前方照応に用いられることがある。以下に、東サハリン方言の前方照応の用法で用いられている指示語の例をいくつか示す。

(11) 丹菊・パクリナ (2014: 54)

p^hac foti=yir^h hə, hud r^hak sik pulkvulk-yut jup-k=yun.
 P.N string=INS INTJ that.thing ? all round-ADV.3PL tie-NMLZ=PL
 「パチの紐で、そう、それをみんな丸く縛った。」

(12) 丹菊・パクリナ (2014: 26)

huŋ p^h=aŋɣ ur-r^h, p^h=aŋɣ tif ur-r^h
 that REFL=female.dog track-CVB.3SG REFL= female.dog road track-CVB.3SG
 「その自分のメス犬の跡をつけて、自分のメス犬の足跡をたどって」

例 (11) と (12) は、それぞれ ‘close’ 代名詞とその連体修飾形が用いられている。

(13) 丹菊・パクリナ (2014: 20)

haj, naf idəfke naf, hud, kud, in r^haŋ..., in mam=ayr^h
 INTJ now see-CVB now that.one that.one they woman they wife=also
 「ああ、こんど見ると、こんど、その、あの、彼らの女の…彼らの妻も」

(14) 丹菊・パクリナ (2008: 29)

“*tulkəs, tulkəs, tulkəs*” *həmdir^h, p^h=aŋɣ az-d=furu. jandŋa,*
 P.N that.way REFL=female.dog call-IND=QUOT why
ku tulkəs əŋra, p^h=r^haf pin-d=la, janr^h ujyi-d=ŋa,
 that P.N ? REFL=house be-IND=Q why not.exist-IND=Q
 「「トゥルクス！トゥルクス！トゥルクス！」と、犬を呼んだそうだ。どうしたんだろう、そのトゥルクスは？自分の家で飼っていたのに。何でいないんだろう？」

(15) 丹菊・パクリナ (2008: 37)

r^haŋə in nr^hə-ŋa, kud⁸ t^haŋk jaŋ napə məckə-data,
 at.that.time they see-CVB that.thing in.past.day s/he yet young-CVB
mu niv=gun aŋr^h, hajm-t mu niv=gun...
 die man=PL also get.old-CVB.3PL die man=PL
 「そのとき彼らを見ると、それが以前に、彼がまだ幼かった頃、死んだ人たちも、年老いて死んだ人たちも…」

⁸ ニヴ語において、数の標示は義務的ではない。先行詞が複数の「彼ら」であっても、単数形の指示代名詞で受けることも可能である。

例 (13) は、不可視代名詞 *kud* が前方照応の用法で用いられている例であり、先行詞「彼女の妻」はかなり前（日本語訳では 14 文の前）に位置している。

一方、例 (14) と (15) は、それぞれ不可視指示語の連体修飾形 *ku* と不可視代名詞 *kud* が前方照応の用法で用いられている例であるが、注目すべきところは、囲み線で示した先行詞と指示語との距離である。先行研究においては、不可視指示語は先行詞との距離がかなり離れている場合に用いられるとされている (Panfilov 1962, Gruzdeva 2006) が、これらの例では直前の文（または節）に先行詞が位置している。

(16) 丹菊・パクリナ (2008: 20-21)

kʰrəuzvi=γun *ha-t* *naf*, *in* *χa* *aj-d*. [中略]
 P.N=PL do.so-CVB.3PL now they name make-IND
tun, *kʰrəuzvi=gun=doχ*, *qoz-rʰ*, *ayrʰ=cij* *ayrʰ=cij*,
 this P.N=PL=DAT have.a.grudge-CVB.3SG when=even when=even
in *tʰχop-t*.
 they complain-IND

「「クルウズ」という集団名をつけたのだ。[...22 文] このクルウズ集団に対して、恨みを持つようになり、いつでも彼ら（クルウズ集団）を脅かしているのだ。」

例 (16) は、「クルウズ集団」の女性に仲間を殺された化物たちがその集団に恨みを持つようになるという話の一部であるが、ここでは ‘proximal’ 指示語の連体修飾形が用いられている。先行詞との距離はかなり離れている（日本語訳では 22 文の前）。

3.2. 談話指示の用法

談話指示と前方照応の違いは、前方照応が前の談話の中に出てきた特定の名詞句を指すのに対し、談話指示の場合は命題 (proposition) や出来事 (event) を指すという点である (Himmelman 1996: 240)。東サハリン方言では、‘proximal’ と ‘close’ の指示語でこの用法が確認できる。以下にそれぞれの例を示す。

(17) 丹菊・パクリナ (2008: 29)

yeɲiv *tʰəlgurʰ=pʰuru* *tud*.
 P.N folklore=QUOT this.thing
 「ゲニヴンの昔話を話したんだよ、いまのはね。」

(18) 丹菊・パクリナ (2008: 36)

tun *tʰəlgurʰ* *ax* *sik=ra*
 this folklore just end=FOC
 「この昔話はこれでおしまいだよ。」

これらの例において、‘proximal’ 指示語は前の談話に出てきた特定の名詞句を指しているわけではなく、昔話の内容全体を指していると解釈しなければならない。

(19) 丹菊・パクリナ (2008: 9)

orɲor^h tʰəlgur^h pʰur^h-ta, hat... hun orɲor^h tʰəlgur^h=kin... [中略]

Uilta folklore tell-CVB.3PL and... that Uilta folklore=with...

nivŋ tʰəlgur^h hud=yin ara voci-nd

man folklore that.thing=with almost same-IND

「ウイлта人が昔話をしたんだが、そのウイлтаの昔話と…[中略] ニヅフの昔話は(それと⁹) 全く同じだ。」

例 (19) の 1 行目の ‘close’ 指示語の連体修飾形 *hun* は、上記の例 (17, 18) と同様の理由で、談話指示の機能を果たしていると解釈できる。それに対し、2 行目の ‘close’ 代名詞 *hud* は、先行名詞句「ウイлтаの昔話」を指しており、前方照応の機能を果たしている。‘close’ 代名詞 *hud* が談話指示の用法で用いられている例は確認できなかった。

4. 非現場指示の用法における指示語の選択

前節では、先行研究での記述とは違って、‘proximal’ の指示語も前方照応の用法を持っており、さらに ‘proximal’ と ‘close’ の指示語の場合は、談話指示の用法も持っていることを確認した。本節では、異なる指示語が選択される要因について検討する。

まず、Gruzdeva (2006) は、前方照応の用法でどちらの指示語が選択されるかは直示の中心 (deictic center) の役割を果たす先行詞との距離で決まると結論づけていた。しかしながら、前節の例 (13)(14)(15) で確認したように、不可視指示語 *kud* の先行詞が直前の節に位置する場合もある。このことは先行詞との距離のほかに指示語の選択に影響を及ぼしている要因があることを意味している。

(20) 丹菊・パクリナ (2008: 41)

pʰ=ɑŋχ=kin uyrət vi-ŋa naf, ax hu kʰutə=roχ pʰrʰə-d=yun.

REFL=female.dog=with together go-CVB now just that hole=DAT come-IND=PL

ku kʰutə=roχ pʰrʰə-ŋa,

that hole=DAT come-CVB

「自分のオス犬と一緒に行くうちに、やっとう例の穴までたどり着いた。この穴まで来た頃には、」

例 (20) において、‘close’ 指示語の連体修飾形 *hu* は、前方照応の用法で用いられているが、その先行詞「穴」は話の初めのところに出ていて、この例は話の後半部分に当たる。先行詞との距離がかなり離れているにもかかわらず、ここでは ‘close’ 指示語が用いられて

⁹ 筆者が書き加えたものである。

いる。一方、例の2行目では、すぐ前の節にある先行詞「穴」を不可視指示語の *ku* で表している。

さらに、不可視指示語の *ku* が、先行詞を指しているわけではなく、一種の強調の機能を果たしていると考えられる例も見られる。

(21) 丹菊・パクリナ (2008: 42)

ku tʰafk, napə ji mækə-jo-ɣar-data,
that before still I young-DIM-PFV-CVB
 「なんと、昔、まだ私が全然幼かった頃に、」

このような不可視指示語 *ku* の強調の用法は、他の指示語には見られない特徴であり、この特徴が聞き手の注意を話題となっている指示対象に向けさせる機能を果たしている可能性もある。

さらに、談話指示の用法においても指示語を使い分けられていると考えられる例が確認できる。

(22) 丹菊・パクリナ (2008: 36) [例 (18) 再掲]

tʰu tʰəlgurʰ ax sik=ra
this folklore just end=FOC
 「この話はもう終わりだよ。」

(23) 丹菊・パクリナ (2008: 9) [例 (19) 再掲]

orŋorʰ tʰəlgurʰ pʰurʰ-ta, hat... hʉn orŋorʰ tʰəlgurʰ=kin... [中略]
Uilta folklore tell-CVB.3PL and... that Uilta folklore=with...
nivŋ tʰəlgurʰ hud=yin ara vocin-d
man folklore that.thing=with almost same-IND
 「ウイлта人が昔話をしたんだが、そのウイлтаの昔話と…[中略] ニヴフの昔話はそれとほとんど同じだ。」

上記の2つの例では、例 (22) は自分から話した昔話のことを指しているのに対して、例 (23) は他人から聞いた昔話のことを指しているという違いがある。また、次のような例も見られる。

(24) 丹菊・パクリナ (2008: 20)

tʰu tʰəlgurʰ, cʰɣarorʰ, milk, tol milk,
this folklore P.N monster sea monster
 「この昔話は、チハロシュという化け物、海の化け物の話だよ。」

例 (24) は昔話を語る前の最初に出てくる部分であり、もちろん先行詞などは存在しない。

この例は、厳密な意味では、先行する談話がないことから談話指示の用法とみなすことはできないが、話者の頭の中には今から話す昔話の内容が入っており、その内容を指しているという点では、談話指示の用法に共通している。

今回の調査に限って言えば、話し手が語った、若しくは今から語ろうとする話の内容を指す場合は、すべての例で ‘proximal’ の指示語が用いられており、例 (23) のように自分以外の人が語った内容を指す場合は ‘close’ の指示語が用いられている。

このような使い分けは、話者が指示対象をどのようにとらえているかに関係していると思われる。すなわち、話者の領域内にあるのかそうではないかで ‘proximal’ 指示語と ‘close’ 指示語を使い分けられていることが考えられる。

5. まとめ

本稿では、ニヴフ語東サハリン方言の ‘proximal’, ‘close’, ‘invisible’ 指示語が持つ前方照応と談話指示の用法について述べた。本稿で述べた主な内容は次の通りである。

- ①ニヴフ語東サハリン方言の指示語は現場指示の用法のほかにも前方照応の用法と談話指示の用法を持っている。
- ②前方照応の用法における指示語の使い分けには、聞き手の注意を話題となっている指示対象に向けさせるか否かが関わっている。
- ③談話指示の用法における指示語の使い分けは、話者が指示内容を自分の領域内のものと捉えているか否かに関わっている。

略号

ABL	奪格	INCL	1人称複数包括	PL	複数
ADV	副詞化	IND	直説	P.N	固有名詞
CVB	副動詞	INS	具格	Q	疑問小辞
DAT	与格	INT	意図	QUOT	引用
DIM	指小	INTER	疑問	REFL	再帰
FOC	焦点	INTJ	間投詞	SG	単数
LOC	所格	NMLZ	名詞化	VOC	呼格
IMP	命令	PFV	完了		

参考文献

- Dixon, R. M. W. (2010) *Basic Linguistic Theory. Vol. 2. Grammatical Topics*. Oxford: Oxford University Press.
- Gruzdeva, E. (2006) ‘How far from *Origo*?’ or What the Distance Means for Nivkh Demonstrative Reference. In M. Suominen et al. (eds.) *A Man of Measure. Festschrift in Honour of Fred Karlsson on his 60th Birthday. Special Supplement to SKY Journal of Linguistics* 19, 190-199.
- Himmelman, N. (1996) Demonstratives in narrative discourse: A taxonomy of universal uses. In Fox (ed.), *Studies in Anaphora*, 206–254. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

- Krejnovič, E. A. (1979) Nivxskij jazyk. In V. M. Solncev et al. (eds.) *Jazyki Azii i Afriki III. Jazyki drevnej perednej Azii (nesemitskie). Iberijsko-kavkazskie jazyki. Paleoaziatskie jazyki*, 295–329. Moskva: Nauka.
- Mattissen, J. (2003) *Dependent-Head Synthesis in Nivkh: A Contribution to A Typology of Polysynthesis*. Amsterdam: John Benjamins.
- Nedjalkov, V. P. & G. A. Otaina (1981) Nivxskie reflektivnye glagoly i tipologija smyslovyx reflektivov. In V. Xrakovskij (ed.) *Zalogovye konstrukcii v raznostrukturyx jazykax*, 185–220. Leningrad: Nauka.
- Panfilov, V. Z. (1962) *Grammatika nivxskogo jazyka 1*. Moscow and Leningrad: Nauka.
- Panfilov, V. Z. (1965) *Grammatika nivxskogo jazyka 2*. Moscow and Leningrad: Nauka.
- Savel'eva, V. & Č. Taksami (1970) *Nivxsko-Russkij slovar'*. Moscow: Sovetskaja Enciklopedija.
- 丹菊逸治 (2008) 『アジア・アフリカ基礎語彙集 51 ニヴフ語サハリン方言基礎語彙集 (ノグリキ周辺地域)』東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 丹菊逸治・ガリーナ パクリナ (2008) 『V・サンギ採録ニヴフ語サハリン方言音声資料集(1) —フトククさんの昔話と体験談—』東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 丹菊逸治・ガリーナ パクリナ (2014) 『ニヴフ言語文化資料集1 タチヤナ・ウリタ伝承集』札幌: 北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

Non-exophoric Uses of Demonstratives in Nivkh (East-Sakhalin Dialect)

Hee-kyung CHAE

(Special Researcher, Tokyo University of Foreign Studies)

This paper describes the anaphoric use and the discourse deictic use of so called ‘proximal’, ‘close’ and ‘invisible’ demonstratives in Nivkh (East-Sakhalin dialect). The main points mentioned in this paper are as follows:

1. Some of the East-Sakhalin dialect demonstratives have anaphoric and discourse deictic functions.
2. The choice of demonstratives in the anaphoric use depends on whether the speaker directs the attention of the listener to the reference in previous discourse.
3. The choice of demonstratives in the discourse deictic use depends on whether a speaker considers the discourse content as his/her mental area or not.

(ちえ・ひぎよん chae.heekyung@hotmail.co.jp)